様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０７０９９

研究課題名（和文）改宗の民族誌：台湾原住民族アミのキリスト教への入信と信仰継承に関する人類学的研究

研究課題名（英文）An Ethnograpic Study of Christianization among Taiwan Indigenous Amis

研究代表者
岡田　紅理子（Okada, Kuriko）

上智大学・総合グローバル学部・研究員

研究者番号：７０８０２５０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：台湾において「原住民族」と総称される先住民族の約8割はキリスト教徒であるといわれ、カトリック教会とプロテスタント長老教会の信者に二分されてきた。同じキリスト教といえども、教義や典礼はもちろん、原住民族への司牧・牧会理解や認識する使命の差異を備える両教会の関係は、宣教初期の対立から協働へと変化してきた。そうした関係性にのいて、それぞれの信者が見出してきた両教会の差異と自らの所属論理を考察するため、本研究はエスニック・グループ「アミ」のカトリシズムの実践と、双方の教会が進めたキリスト教的神聖存在の翻訳に注目した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
台湾の「原住民族」アミの間で継承されてきたキリスト教実践の実相を検討した本研究をとおして、まだ充分な研究蓄積がない原住民族のキリスト教化に新たなデータを提供することができる。また、「周縁化されたマイノリティ」として見られてきた人々にとって宗教が果たしてきた役割を提示することで、「宗教を選び、信者として生きる」意味と論理を再考する一端となると考える。

研究成果の概要（英文）：As a result of evangelization which started after the end of the Japanese colonization, about 80 percent of Austronesian indigenous peoples of Taiwan became Christians of Catholic and Presbyterian Churches. The differences of doctrine, liturgy, pastoral ministry or even the understanding of mission that two Churches share had raised the rivalry in the early period of evangelization, however, theological interaction from the 1980s has promoted to bring about Churches’ cooperative relation. In order to understand the logic of lay members to justify own church affiliation under the circumstances, this research explored the daily Catholic practices among the ethnic group “Amis” and the Amis-language translation of the Christian denominations by the two Churches.

研究分野：文化人類学

キーワード：台湾原住民族　アミ　キリスト教

１．研究開始当初の背景

台湾においてキリスト教は、蒋介石率いる中国国民党による一党独裁政治下で不十分だった社会保障に対して独自に教育、職業訓練、医療、金融サービスを展開し、先住民族（台湾では「原住民族」）の信者を獲得してきたといわれる。また、1980 年代の民主化過程においては、原住民族の権利の向上と、原住民族諸語と種々の文化実践の保存を訴える原住民族運動を主導し、原住民族の信頼を勝ち取ってきた。しかし従来の研究は、以上のような背景を踏まえて原住民族社会におけるキリスト教の影響力の大きさに言及する一方、教会共同体という紐帯、その形成過程、当事者が改宗と信仰継承を選択してきた論理を実証的に解明してこなかった。

これに対して研究代表者は、教会関係者によって考察がなされてきたプロテスタント長老教会（台灣基督長老教會）の原住民族宣教史に対し、研究蓄積の少ないカトリック教会について、原住民族最大のエスニック・グループである「アミ」を対象とした、人類学的な手法を用いた調査をおこなってきた。そして、日々の生活のなかで継承・実施される既存の文化体系とカトリク信仰が相互に作用しながら競合・融合また持続・変容してきた動態を研究してきた。

研究をすすめるなかで、改宗と信仰継承という当事者の行為は、連続的なものとして単純化できる過程ではなく、アミの、カトリック教会と長老教会という異なる教会への理解、社会的地位、出身集落を超えたつながりが相互に作用しながら実現してきたということがみえてくるようになった。そして、そのような多様なアミのキリスト教化を理解するためには、アミ−カトリックという一側面に限定することなく、長老教会にも目を配る必要がある。なぜなら、上述のように原住民族のキリスト教徒がカトリック教会と長老教会とに二分されているだけではなく、原住民族の文化の保護、権利の向上を目指すために両教会が協働関係を構築してきたからであり、またカトリック教会とプロテスタント長老教会のどちらか一方のみを対象として「原住民族のキリスト教化」を捉えることはできないからである。さらに、2016 年 5 月の政権交代以来の緊迫した台湾の対中国関係と「轉型正義」（移行期正義）の推進により、原住民族と密接な関係にある両教会の協働意識は今後より一層高まることが予想され、カトリック教会と長老教会を対照しながら原住民族のキリスト教化の動態に着目することの重要性が見出される。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本植民地時代終了後から台湾の先住民族である「原住民族」の約 80 パーセントの間でキリスト教が信仰されているという事実に着目し、かれらがキリスト教に改宗し、その信仰を継承してきた日常の動態を明らかにすることである。

これまでのカトリック教会を対象とした研究の結果として残された課題を踏まえ、台湾のプロテスタント諸派の最大教派である長老教会のアミの信者がなぜプロテスタント信仰を選び、長老教会に入信し、信者としていきてきたについて、調査・考察することに主眼を置くことを想定していた。そして、最終的にこれまでのカトリック研究の成果と対照することで、カトリック教会と長老教会それぞれに所属するアミの改宗と信仰継承の構造的な齟齬、一致、差異を民族誌的に描出することを意図した。

３．研究の方法

以下に示すような文献調査とフィールドワークをおこなった。

（1）カトリック教会ではない、長老教会への入信と信仰継承の選択に関する研究（文献調査）

（2）在来のコスモロジーを援用した日本植民地時代後の宣教期における原住民族キリスト教信仰理解に関する研究（聞き取り調査）

台湾に渡航して実施した調査では、長老教会への入信の正当性がいかに見出され、語り継がれてきたのかについて、特にカトリック教会との顕著な差として現代でも残っているキリスト教の神聖存在のアミ語翻訳に着目してフィールド調査をおこなった。調査では、長老教会総会本部、中央研究院民族学研究所、国立台湾図書館での関連資料の収集のほか、信者や、日本植民地時代後の 1946 年に原住民族の神学者・牧師養成を開始した玉山神学院を修了し、アミ語の聖書翻訳や賛美歌製作に関わったアミの神学者と、原住民族諸語による聖書翻訳改訂作業に携わる原住民族タロコの牧師を対象としたインタビューをおこなった。

本研究で収集したデータはすでに博士論文に活用されたが、今後は、参与観察とライフヒストリー内容の分析から、長老教会とカトリック教会の対照を進め、「原住民族のキリスト教化」の検討を実証的に進める予定である。

４．研究成果

（1）キリスト教的神聖存在のアミ語翻訳

宣教を補助する存在として原住民族の信者指導者（指導員）を宣教初期から育成していた長老教会と、外国人神父を宣教の主な担い手としていたカトリック教会とでは、キリスト教という同じ範疇にあっても、その信仰の中核にある「神」や「聖霊」といった神聖存在の翻訳（あるいはそれに該当する現地語からの転用）に相違が生じてきた。

長老教会は、「神」をアミの在来のコスモロジーにおいて複数存在すると考えられていた超自然的霊的存在の総称である *kawas*（カワス）の、頭文字を大文字に変換した *Kawas* を用いてきた。一方、カトリック教会は、カワスが本来単一ではなく複数の存在であり、「善でしかない存在」であるキリスト教的神とは異なり、悪のカワスも存在するというアミの観念を踏まえ、

「（生物学的）父」を示す *wama*（ワマ）に由来する *Wama* を主に用いてきた。
両教会がおこなってきた語彙の選択には差があるものの、アミ語の頭文字を大文字で表記するという点は、在来のコスモロジーにもとづく神聖存在とキリスト教信仰における神聖存在を区別しようとする共通の論理を背景としていた。とはいえ、宣教や牧会・司牧は口頭でおこなわれる行為であるため、アミ語をアルファベットで表記してもなお、その受け取り手であるアミは語彙の音に依存したため、在来のコスモロジーとキリスト教信仰とに同一性を見出した。そして宣教師は、そうしたアミの対応を翻訳の結果生じた「弊害」とみなした。

（2）翻訳による「弊害」への対応
キリスト教信仰における神聖存在のアミ語への翻訳によって生じた「弊害」に対して、宣教師たちは長老教会とカトリック教会それぞれで異なる対応が講じられていった。
聖書、殊に福音書や使徒書簡の意味を詳細かつ忠実に読むという福音主義を徹底することを貫こうとした長老教会は、キリスト教的神 *Kawas* と在来の超自然複数存在 *kawas* を、聖書本文の文脈に即して視覚的に区別することを強調し、両者の同一性の否定を図った。また同時に、日本植民地時代後も部分的に継承されていた在来祭祀への信者の参加に対して、長老教会が否定的な態度を具体的に示したことで、在来のコスモロジーは迷信視されていった。他方、カトリック教会では、キリスト教的神 *Wama* と生物学的父 *wama* の相違が口頭で強調されたが、同時に新たに *Pa'oripay*（パオリパイ：いのちを与える者）という語彙をも用いることで、キリスト教的神が信者自身の生物学的父とは同一の存在ではないと明確に示そうとした。
こうした対策は、結果としてアミのキリスト教徒の間で、在来のコスモロジーにおける神聖存在とキリスト教信仰における神聖存在を峻別するという効果を上げていった。とはいえ、カトリック教会が神や聖霊以外にも聖母マリアと聖人への崇敬を表明する信仰を有することが、在来のコスモロジーにおける神聖存在とキリスト教信仰における神聖存在を分離しようとする神父たちの試みを阻んだ状況も生まれた。これによって、長老教会が告白する信仰こそが「真の信仰」であり、カトリック教会を「迷信から離脱できない」存在であるかのようにみなす視座がプロテスタント信者の間で形成され、結果として現在においても長老教会とカトリック教会それぞれのアミの信者に亀裂を生じさせていることが明らかになった。

（3）アミのカトリック教会への入信と信仰継承の実相
博士論文では、カトリシズムを事例として、アミがキリスト教徒になり、キリスト教信仰を継承してきた日本植民地時代後から現在までの動態を民族誌的研究から考察し、原住民族のキリスト教化を原住民文化の変容過程とみなす従来の原住民族研究の議論を再構築した。
具体的には、アミの日本植民地経験によるコスモロジーの変動がキリスト教という一神崇拝の受容を可能としたこと、またカトリック教会への入信はカトリック信仰に在来祭祀との類似性が見出されたことを示した。日本植民地時代後は、統治機構が日本から中華民国に移行するなかで、アミは、カトリック信者としての集合意識をとおしてアイデンティティ喪失の危機の克服を図ったが、そうした意識はカトリック信仰を紐帯とした出身集落を超えたアミ同士のつながりを強化させた。また、現代においては、カトリック教会が文化継承の拠点としても機能するようになると、「アミであること」と「カトリック信者であること」が不可分の関係を築いていき、それがアミの次世代への信仰継承を副次的に促したともともに、アミは「アミ・カトリック」として自らの行動と生活を規定してきたことを論じた。
これによって、原住民族のキリスト教化が、単にキリスト教信仰によってアミに既存の規範、価値観、慣習の変容を強いる過程というよりも、アミ自身が日々変化する現実と対峙していくためにおこなう調整と交渉という生活世界の再編過程であることを描出した。

（4）今後の方向
オーストロネシア語族に属し、台湾人口の 2.4 パーセント（2019 年 3 月現在）を占める原住民族の間では、日本の植民地支配終了後から活発におこなわれたキリスト教宣教の結果、現在でもその約 8 割の人々の間でキリスト教が信仰されているといれる。
原住民族キリスト教徒は、カトリック信者とプロテスタント長老教会信者にほとんど二分されており、両教会はかつて、信者の獲得という目的のために対立関係にあったものの、1970 年代以降は神学的な交流を通じた協働関係を構築してきた。一方で、原住民族のカトリック信者と長老教会信者の間では、教義の差やそれぞれの教会が進めてきた司牧・牧会の差を背景として他方を敵視するような状況が現在でも散見される。
多民族・多文化「国家」であることを標榜する台湾において、原住民族はその象徴的な存在としてたびたび言及されてきた。近年緊迫する対中国関係のなかで、台湾キリスト教会がそうした教派間の「溝」といかに向き合い、原住民族信者を導いていくのか、さらにはそうした教会の動きのなかで、原住民族キリスト教徒の「カトリック信者であること」と「長老教会信者であること」がいかに規定されていくのかに着目することが、今後の課題として確認された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1　件）

① 岡田紅理子、『キリスト教への入信と信仰継承に関する民族誌的研究：台湾原住民族アミとカトリック教会を事例として』、上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士論文、査読有、2018 年、pp. 1-222。

〔学会発表〕（計　3　件）

① OKADA, Kuriko. Is Incultration “the Continuity of Superstition”?: The Challenges among Taiwan Indigenous Amis. The 2nd Annual Conference of the East Asian Society for the Scientific Study of Religion. Hokkaido University (Sapporo), Japan. July 27th-28th, 2019.（個人発表採択済）

② OKADA, Kuriko. The Dynamics of Taiwan Indigenous Peoples’Catholic Practice: From Amis’ Colonial Experience to Urban Migration. NZ & Australian Study of Join Religions Conference 2018. University of Auckland (Auckland), New Zealand. November 30th, 2018.

③ OKADA, Kuriko. Urban Migration and Religious Landscape: A Study of Taiwan Indigenous Amis and Catholicism. The International Conference on Cordilleras Studies. The Manor at Camp John Hay (Baguio), Philippines. July 14th, 2017.

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。